

# 中国ムスリム女性の装い

## —1949年以前にみられた回族・サラル族の服装の再現—

### Clothing of Chinese Muslim Women:

Reproduction of Hui and Salar Clothes before 1949

高木 美希

Miki Takagi

#### 要旨

中国ムスリムの諸民族は中華世界に居住し、中国文化とイスラーム文化双方の影響を受けながら独自の文化を形成してきた。しかし、1949年に中華人民共和国が成立した後、中国国内では1949年以前の服装は「封建的」なものであるとして徹底的に排除され、人民服が実質的な国民服とされた。このため、他の民族と同様に、中国ムスリムの伝統服の制作・継承・保存も停滞状態にあると言える。現在、中国国内の博物館や観光地、書籍などで中国ムスリム諸民族の民族衣装が紹介されるが、そのなかには洋服をもとにデザインしたような現代的な衣装が多く、伝統服であるとは言い難い。このような状況をふまえ、本研究では1949年以前の中国ムスリム女性の服装に関して残された写真をもとに分析し、2体の服装を再現する。さらに、デザインやパターンを図で示すことによって、中国ムスリム女性の伝統的な服装が未来へと継承されていくことを目指す。

●キーワード：回族（Hui Muslim）／サラル族（Salar）／民族衣装（folk costume）

#### I. はじめに

現在、中華人民共和国には2000万人以上のイスラームを信仰する少数民族が居住している。その内訳は、漢語を母語とする回族、モンゴル語系言語を話す東郷族、保安族、テュルク語系言語を話すサラル族、ウイグル族、カザフ族、キルギス族、ウズベク族、タタール族、イラン語系言語を話すタジク族である。回族は中国各地に分散し、東郷族と保安族は甘粛省、サラル族は青海省に集住し、ウイグル族以下の諸民族は主に新疆ウイグル自治区に居住する。

中国にイスラームが伝来したのは、大食国（正統カリフ時代のアラブ帝国）が唐に使節を派遣した651年と考えられており、その後、宋代に多くのアラブ系やペルシア系の商人が東南沿海部の都市に定住し、モスクを中心に独自のムスリム社会を形成した<sup>1)</sup>。アラブ系やペルシア系の商人は漢人などと通婚し、彼らの子孫が現在の回族であると考えられている。回族は西北地方を中心に中国各地に居住しており、中国ムスリムの中でもっとも人口が多い。新疆ウイグル自治区に居住するテュルク系諸民族には中央アジアの文化的要素が強い一方、回族、東郷族、保安族、サラル族は中華世界に生活しているため、中国文化（主に漢文化）とイスラーム文化双方の影響

を受けている。例えば、回族のモスクは「清真寺」と呼ばれ、聖典クルアーンの章節を書いたアラビア文字や漢字が装飾に使用されているが、モスクの伝統的な建築様式は仏寺や道観、廟などに類似したものである（図1・図2）。

本稿では、中国ムスリムの女性たち（主に回族・サラル族）が1949年以前に日常生活のなかで着用していた服装に注目する。後述するように、1949年に中華人民共和国が成立した後、中国国内では1949年以前の服装は「封建的」なものであるとして徹底的に排除され、人民服が実質的な国民服とされたことがあった。このため、他の民族と同様に、中国ムスリムの伝統服の制作・継承・保存も停滞状態にある。中国国内の博物館や観光地、書籍などで民族衣装が紹介されるが、そのなかには洋服をもとにデザインしたような現代的な衣装が見られ、伝統服であるとは言い難い。言い換えれば、中国ムスリムの伝統服は正確に継承されていないのである。このような状況をふまえ、本稿では中国ムスリム女性のかつての服装を再現する。さらに、デザインやパターンを図で示し、それらをもとにして衣服を制作できるようにする。そして、中国ムスリム女性の伝統的な服装が未来へと継承されていくことを目指す。



図1 フフホト市にある清真寺（2017年撮影）



図2 清真寺の内装（2017年撮影）

## Ⅱ. 変貌する中国ムスリム女性の服装

現在、多くの人がチャイナドレスを中国の伝統服であると理解しているだろう。チャイナドレスは中国語で「旗袍（チーパオ）」と言い、清朝時代に満族の女性が着用していたものがもととなり中国全土に波及していったものである<sup>2)</sup>。1912年に中華民国が成立し、現在の旗袍の形は中華民国の初期にできあがったものとされている<sup>3)</sup>。1921年に中国共産党が設立され、1949年には中華人民共和国が成立した。その後、1966年に文化大革命が発生し、伝統批判の運動から旗袍そのものへの批判へと繋がった。中華民国時代の旗袍は「資本主義の悪しき服飾」として徹底的に排除されるようになり、持つことさえも許されなかった。多くの人は紅衛兵に見つかる前に旗袍を火で燃やし、ハサミで切り裂いた<sup>4)</sup>。そして、旗袍に代わって中国の人々が身につけたのが人民服であった。

1978年、改革開放政策が打ち出され、海外の情報や文化が中国国内に流入し、西洋的なファッションが中国の服飾事情を大きく変化させた。しかし、西洋的なファッションの広まりのなかで、中国伝統の服飾形態や民族的な文物を見つけるのが一層困難な状況になった<sup>5)</sup>。こ

のような状況は漢族だけでなく、中国ムスリムにおいても同様のことが言える。

現在の中国ムスリム女性の服装を調査するため、2017年に北京市・フフホト市でフィールドワークを実施した。両市ともに回族を中心とした中国ムスリムの集住地域があり、ムスリム向けの飲食店や雑貨店などが密集している。一般的に、ムスリム女性は「美（や飾り）」を目立たせてはならない」ということから、肌の露出を避け、頭髪を覆う服装をするとされる<sup>6)</sup>。中国ムスリム女性の服装を調査したところ、他のイスラーム社会の女性と同じように、頭髪をヴェールで覆い隠す女性が多く見られた（もちろん、ムスリムであっても頭髪を覆わない女性もいた）。また、中国ムスリム女性の特徴として、布状のヴェールではなく、つばのない帽子の中に頭髪を入れて隠す女性もよく見られた。この帽子は、他の国のイスラーム社会ではあまり見られないものである（図3）。

その一方、帽子以外のヴェールや服装は「中国以外では見られないもの」とは言い難い。ヴェールには、東南アジアや南アジアなどのイスラーム社会で見られるデザインによく似ているものが多い。例えば、フフホト市の回族集住地域にある結婚用品店では、南アジアの花嫁衣装であるレハंगाを店頭飾って販売していた。そばには、その花嫁衣装を着用して結婚式を挙げた中国ムスリム女性の写真が何枚も飾られていた。日常生活のなかで使用するためのヴェールにも、東南アジアのヴェールによく見られる日差し除けのパーツがつけられた伸縮性のあるものが販売されていた。また、頭部以外の服装については、肌の露出は少ないが、現代の漢族とほとんど変わらないような洋服を着用していた。

改革開放政策以降に中国で出版された民族衣装に関する書物を調べてみると、フィールドワーク中には全く見られなかったものが中国ムスリム女性の民族衣装として紹介されている<sup>7)</sup>。光沢のある鮮やかな色の生地を使って作られた中国風な洋服にスパンコールが縫い付けられ、帽子に重ねた透けるヴェールにはコイン飾りのような装飾がされている（図3・図4）。装飾のデザインはどことなくイスラーム世界に対するオリエンタリズムを感じさせる。装飾のデザインだけではなく、明るく鮮やかな色彩も古くから残されている清真寺や書道などの落ち着いた色彩とは全く異なっている。こうした状況に鑑み、人民服が実質的な国民服となる前の中国においても中国ムスリム女性はこのような服装をしていたのだろうかという疑問を抱くようになった。





図3 現在の中国ムスリム女性（2017年、フフホト市にて撮影）



図4（左）・図5（右） 書物で紹介されている「民族衣装」

### Ⅲ. 1949年以前の服装の再現

#### 1. 写真の分析

1949年に中華人民共和国が成立し、その後次第に人民服が実質的な国民服へと変わっていったため、1949年以前の中国ムスリム女性の服装について調査をする。その結果をふまえ、現在ではほとんど見られない中国ムスリム女性の伝統的な服装を再現する。中国では先に述べた文化大革命により、伝統的な服装やそれに関する書物などが発禁処分となった歴史があり、実物資料は非常に少ない。そのため、中国ムスリム女性の服装に関しては1949年以前に日本で出版された書物や、改革開放政策以降に中国で出版された書物に掲載されている写真をもとに分析する方法をとり、その中から、写真に全身が写っているものを2種類選択した。

1種類目は、回族の女性たちの写真2枚である（図6・図7）。撮影者は異なるが、1939年と1940年に北京で撮影されたものであり、服装がよく似ている。被写体の顔つきから中年～高齢の女性たちであると考えられる。全員が白っぽいヴェールを被り、ふくらはぎからくるぶしまでの丈の、ゆったりとしたシルエットのコートのようなものを着用している。コートの下には濃い色のパンツ

を着用している。後姿の写真からは、ヴェールの中心に縫い目があり、肩甲骨の下あたりでまっすぐ裾が上げられていることが確認できる。また、ヴェールには左右に紐がつけられており、あごの下で結ばれている。

2種類目は、サラル族の女性の写真2枚である（図8・図9）。1930年代に青海省で撮影された写真であり、被写体の顔つきや服装から2枚とも同じ人物の若い女性であると考えられる。あごのあたりに布がつけられたヴェールを着用しており、この布は首回りの露出を避けるためにつけられたものであると推察する。長袖のトップスを着用し、その上にベストを重ねている。ベストは右前身頃側に打ち合わせがあり、チャイナボタンで留める形態になっている。地面に着くほどの丈のゆったりとしたシルエットのパンツを履いており、パンツには花柄のプリントが施されている。

2種類の写真ともに、現代の中国ムスリム女性のうち、これらの形態のヴェールを着用している人は非常に少なく、他の国のイスラーム社会でも全くと言っていいほど見られないデザインである。中国ムスリム女性の伝統的なヴェールの色についてはいくつかの文献に記述があり、年齢によって色が異なると記述されている<sup>8)</sup>。伝統的には若い未婚女性は緑、既婚女性は黒、老婦人は白のヴェールを着用する。しかし、2種類の写真ともにモノクロであり、ヴェール以外の色については明確ではない。また、素材についても光沢が無いものであることは判断できるが、組成や生地名については判断が難しい。そこで、写真が撮影された時代背景から全てのアイテムにおいて化学繊維の生地は使用されておらず、天然繊維の生地が使用されていると判断した。

#### 2. 制作

##### 2-1. デザイン

写真の分析をもとに回族・サラル族の女性の服装を再現する。素材は回族のコートのみ絹生地を使用し、それ以外のアイテムは全て麻生地を使用する（図10・図11）。

##### （1）回族

回族の服装を再現するため、ヴェール・コート・パンツを制作する（図12）。

ヴェールは、頭の中心を通る切り替え線を縫い合わせて縫製する。裾端と裾にぶつかる端を三つ折り処理したあと、顔周りの縫い代を共布の紐で処理し、その紐を延長させてあごの下で結んで着用する。





図6 1940年に北京で撮影された回族の女性たち

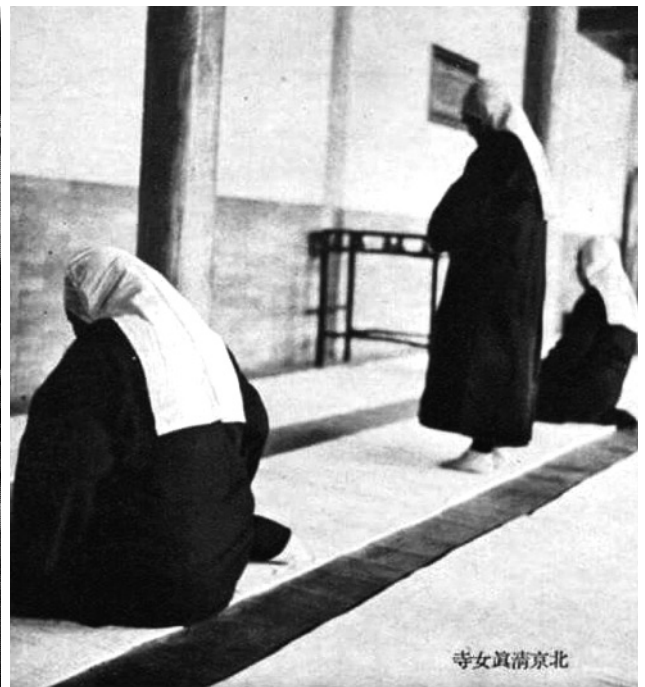


図7 1939年に北京で撮影された回族の女性たち

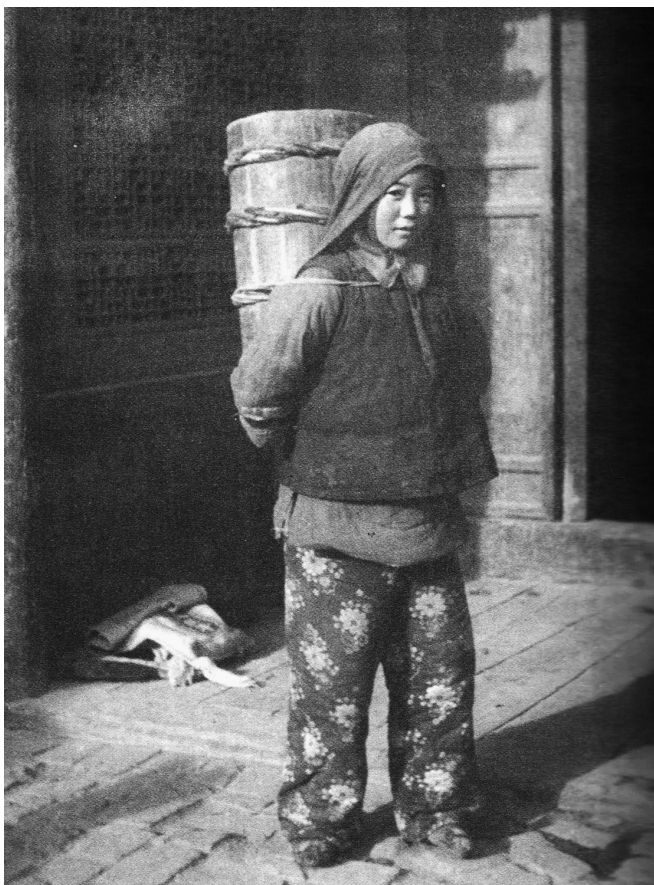


図8 1930年代に青海省で撮影されたサラール族の女性



図9 1930年代に青海省で撮影されたサラール族の女性



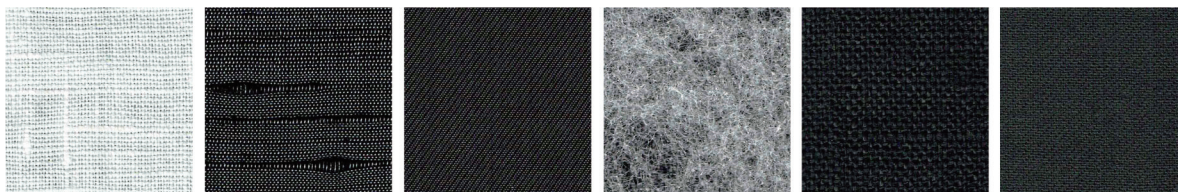


図 10 使用素材：回族

左からヴェール（表地）、コート（表地）、コート（裏地）、コート（キルト綿）、パンツ（表地）、パンツ（スレキ）

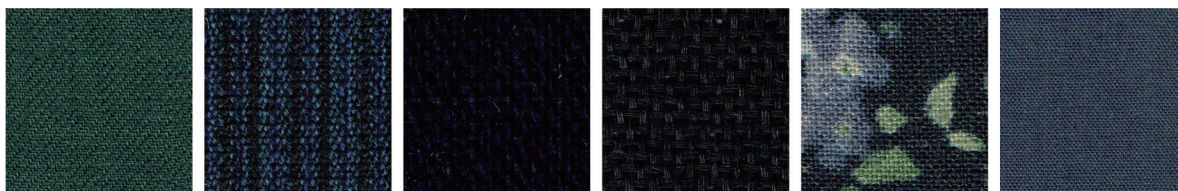


図 11 使用素材：ラサル族

左からヴェール（表地）、トップ（表地／表面）、ブラウス（表地／裏面）、ベスト（表地）、パンツ（表地）、パンツ（スレキ）

コートはふっくらとした印象にするためにキルト綿を入れ、表の絹生地と裏地で挟んで制作する。袖付け線がなく、身頃と袖が繋がった直線的なパターンであるため、生地幅を超える寸法になる。そのため、前後中心と袖口で切り替え、パーツを分ける。打ち合わせは右前身頃側にあり、チャイナボタンで留め付ける。キルト綿を衿以外のパーツに入れるが、衿には硬い接着芯を貼り、首に沿って立ち上がるようにする。両脇をスリットにし、運動量を確保する。

パンツはウエストから裾にかけて細くなったシルエットである。伝統的な中国服の縫製方法にならい<sup>9)</sup>、ウエストを綿スレキで切り替え、腰紐を結んで着用する。腰紐を結んだら綿スレキ部分を折り、腰紐を隠す。腰紐が安定するように、両脇と後ろ中心にベルトループを縫い付ける。

## (2) サラル族

サラル族の服装を再現するため、ヴェール・トップ・ベスト・パンツを制作する（図 13）。

ヴェールは頭の上に載るパーツと首を隠すパーツで構成する。2つのパーツは顔周り上部で縫い合わせ、こめかみから下は振らす。首を隠すパーツには、もとした写真に合わせて前中心にボタンを留め付ける。

トップは上にベストを重ねて着用することをふまえて、衿のないデザインである。切り替えは回族のコートと同様に前後中心と袖口でパーツを分け、右前身頃側で打ち合わせてチャイナボタンで留める。もとした写真に合わせて、袖口のパーツは表地の裏面を使用して色を切り替える。裏地のないデザインで、衿ぐりや打ち合わせは見返しで処理する。両脇をスリットにし、運動量を

確保する。

ベストは、写真ではヴェールを着用しているため首回りが見えないが、衿をつけるデザインにした。身頃と衿のみで構成するため、トップや回族のコートのように生地幅が足りなくなることはない。そのため、前後中心に縫い目を入れずに縫製する。表地と裏地を共布で同型のパターンにし、毛抜き合わせにする。前身頃の右側で打ち合わせて、チャイナボタンで留める。

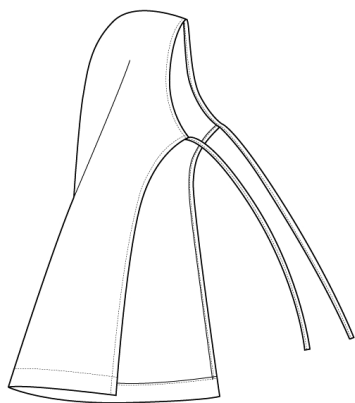
パンツはウエストから脚部までゆとりを持った大きなシルエットである。回族のパンツと同様にウエストを綿スレキで切り替え、腰紐を結んで着用する。腰紐が安定するように、両脇と後ろ中心にベルトループを縫い付ける。

## 2-2. パターン

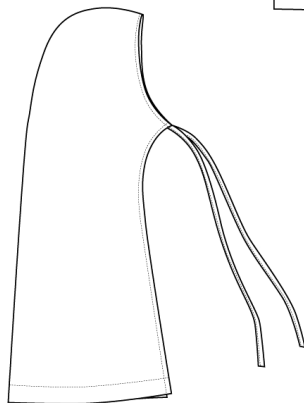
作品は身長170cm、バスト83cm、ウエスト64cm、ヒップ91cmのヌードボディーに合わせてパターンを作成した。2体ともにゆったりとしたシルエットであり、パンツも紐を締めて自由な寸法で着用するため、ヌードボディーの寸法から差異があっても着用することができる。以下は縫い代つきパターンを縮小したものである（図 14-16）。各パーツは表で示した枚数分、生地を裁断する（表 1）。

## 2-3. 完成写真

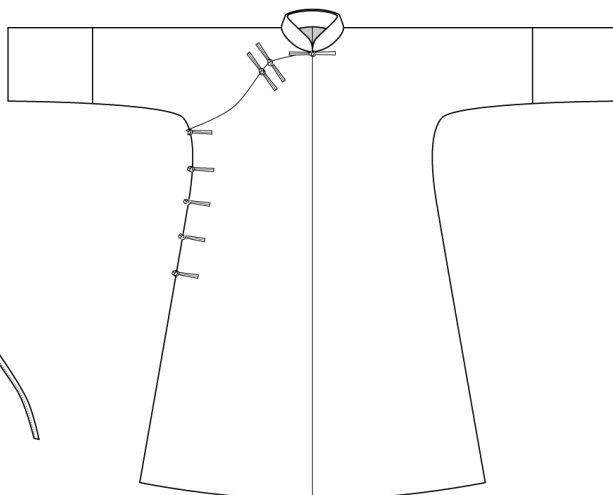
以下は完成した作品をマネキンに着用させて撮影したものである。着用マネキンの寸法は身長 176.5cm、バスト 77cm、57cm、ヒップ 87cmである（図 17-19）。



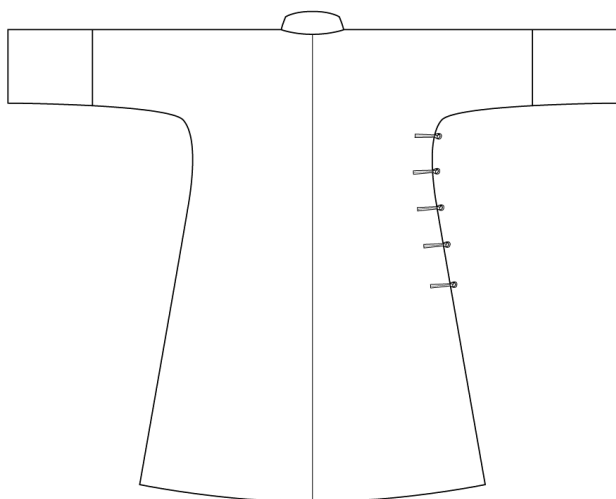
ヴェール



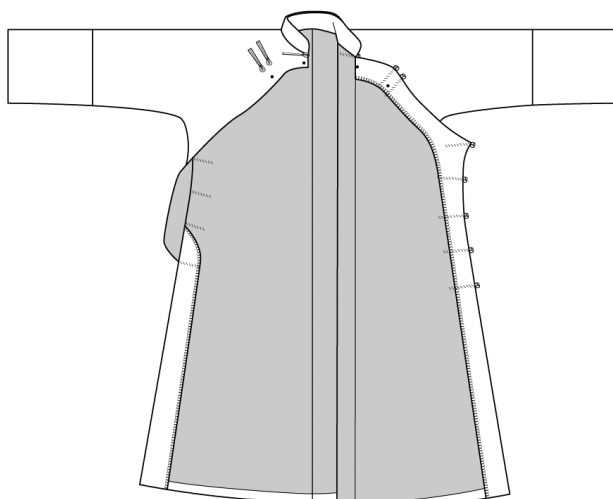
ヴェール



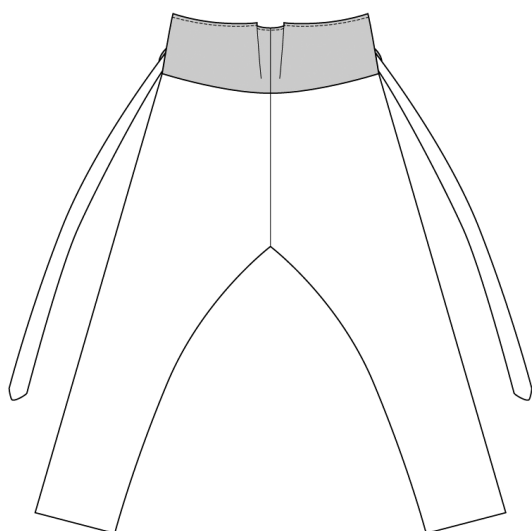
コート (前)



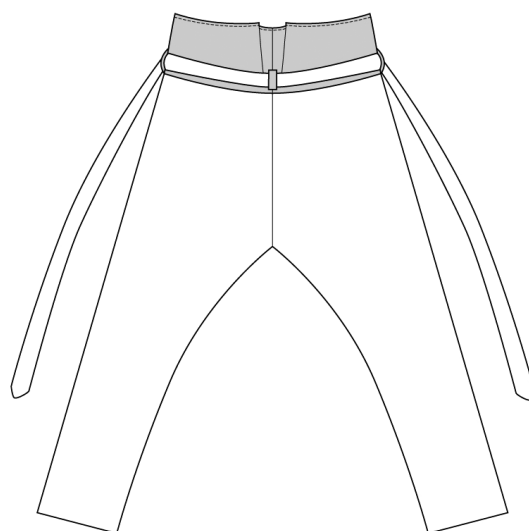
コート (後ろ)



コート (前)



パンツ (前)



パンツ (後ろ)

図 12 ハンガーイラスト：回族



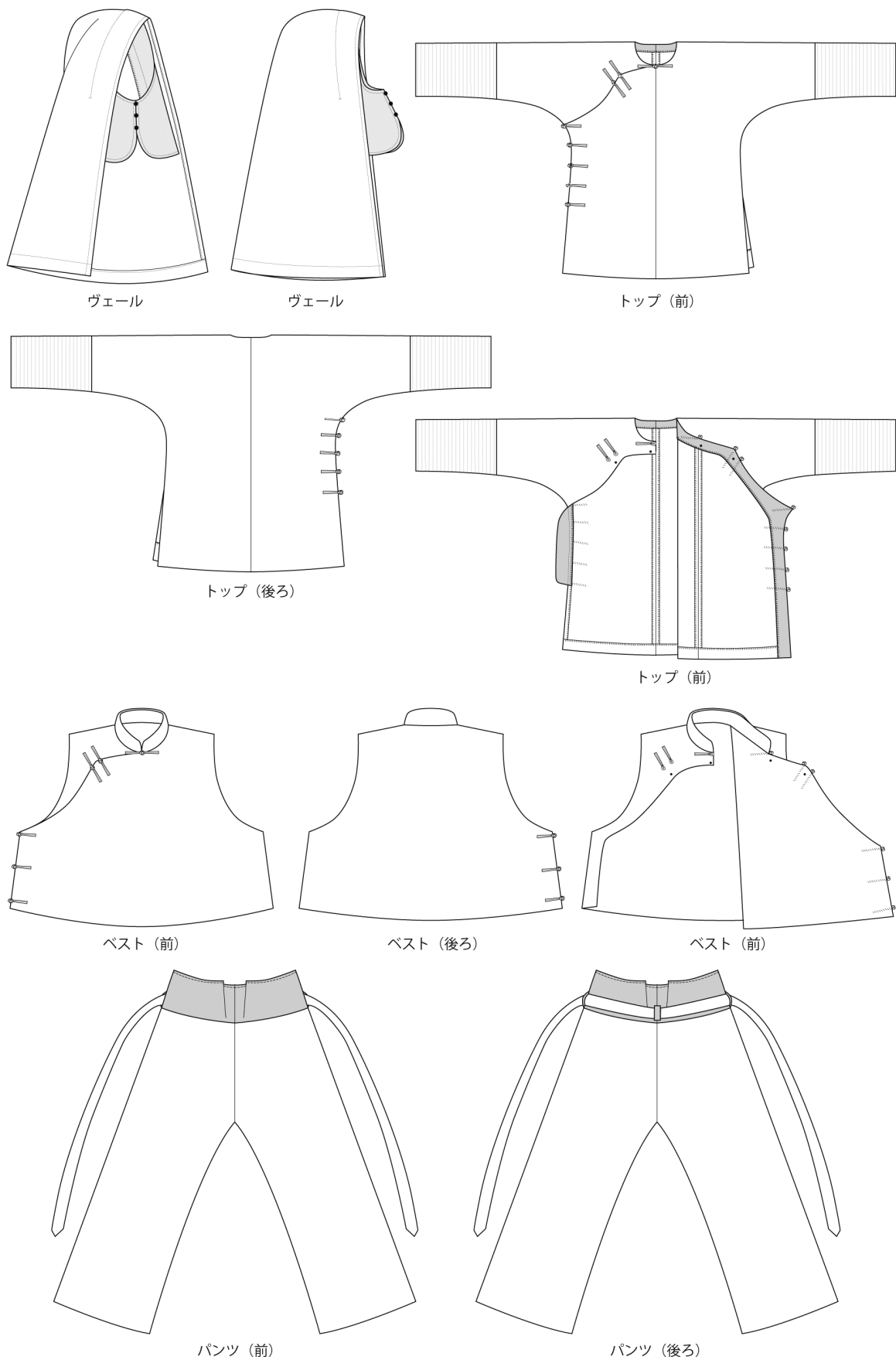


図 13 ハンガーイラスト：サラール族

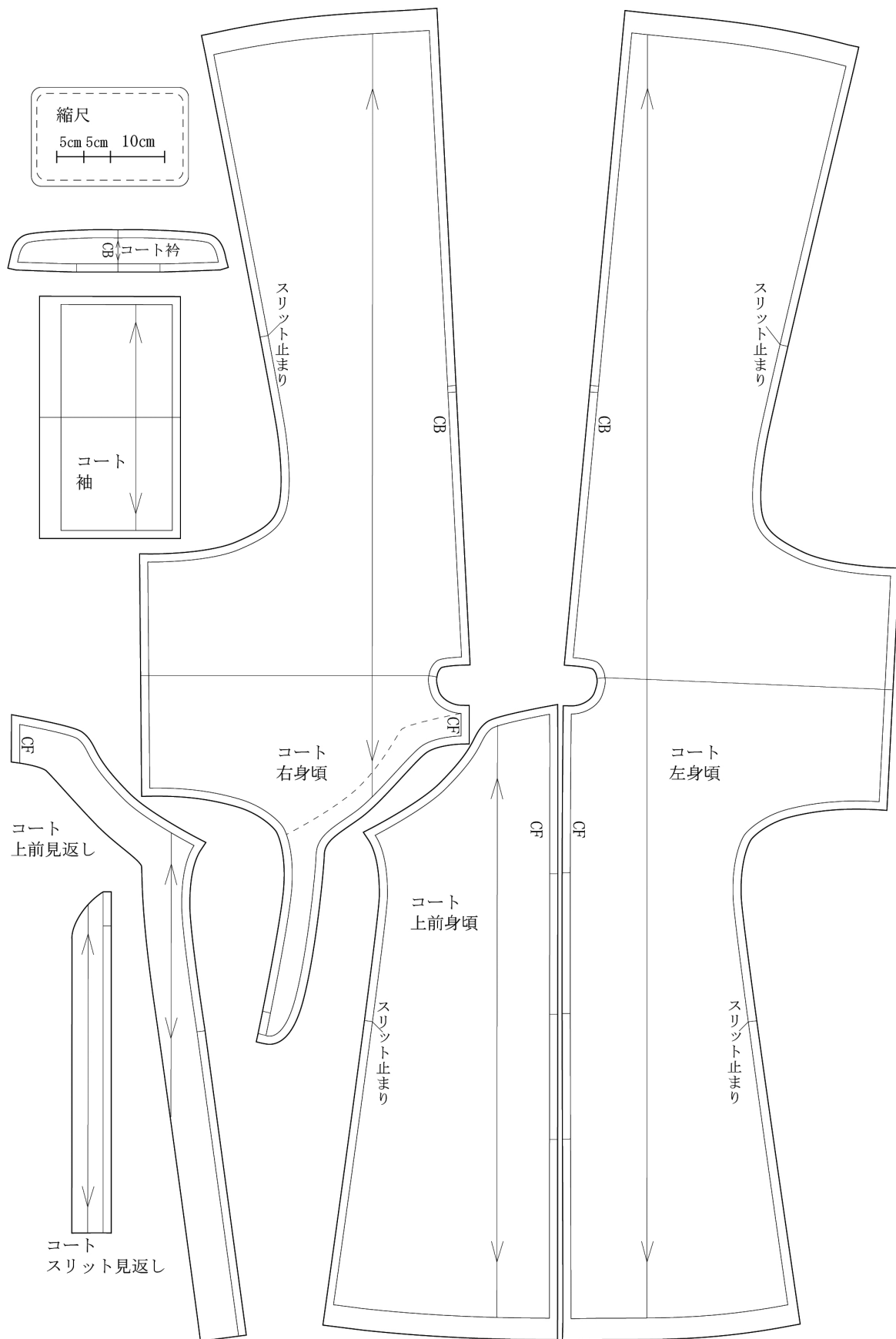


図 14 パターン：回族（コート）



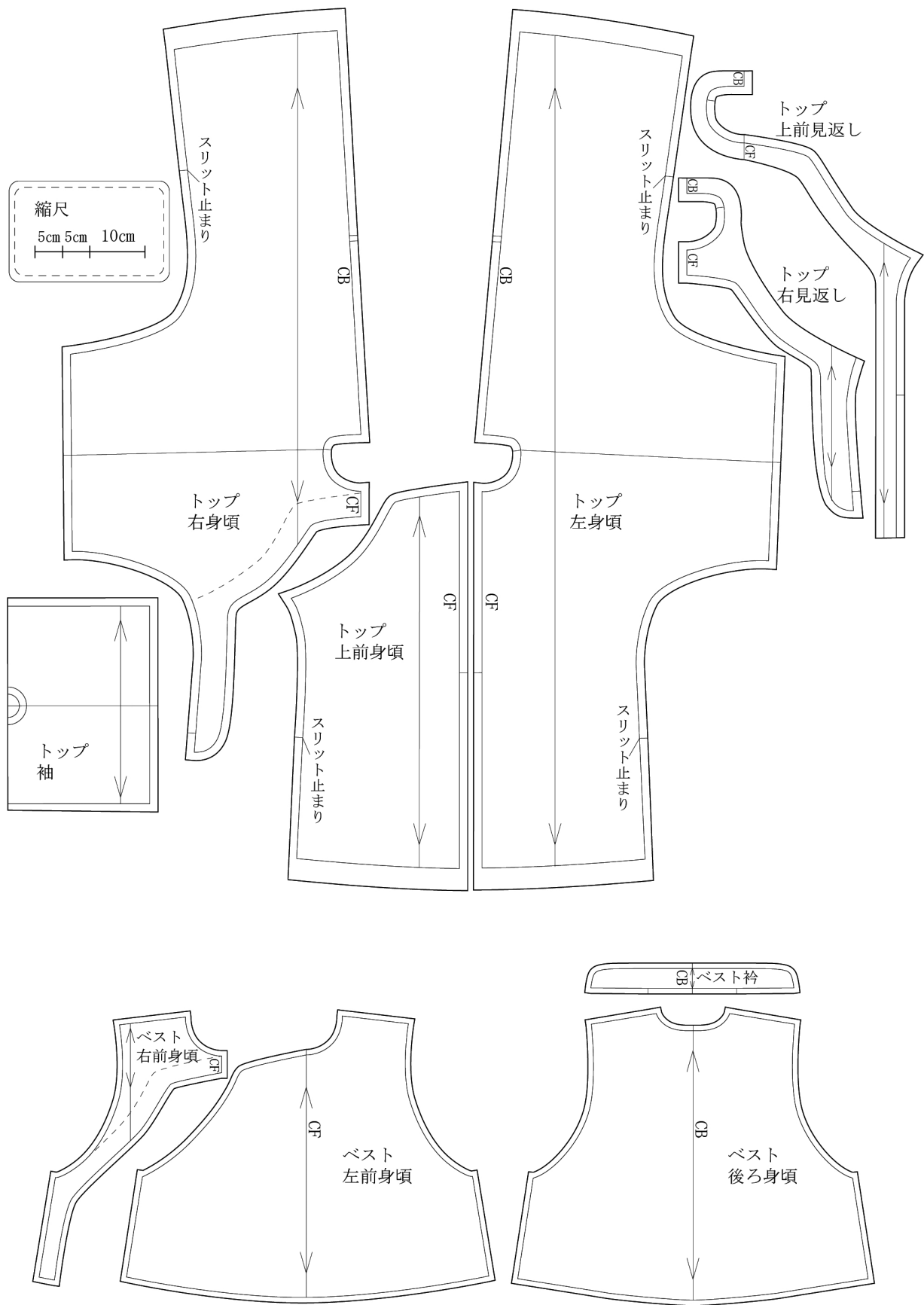


図 15 パターン：サラール族（トップ、ベスト）

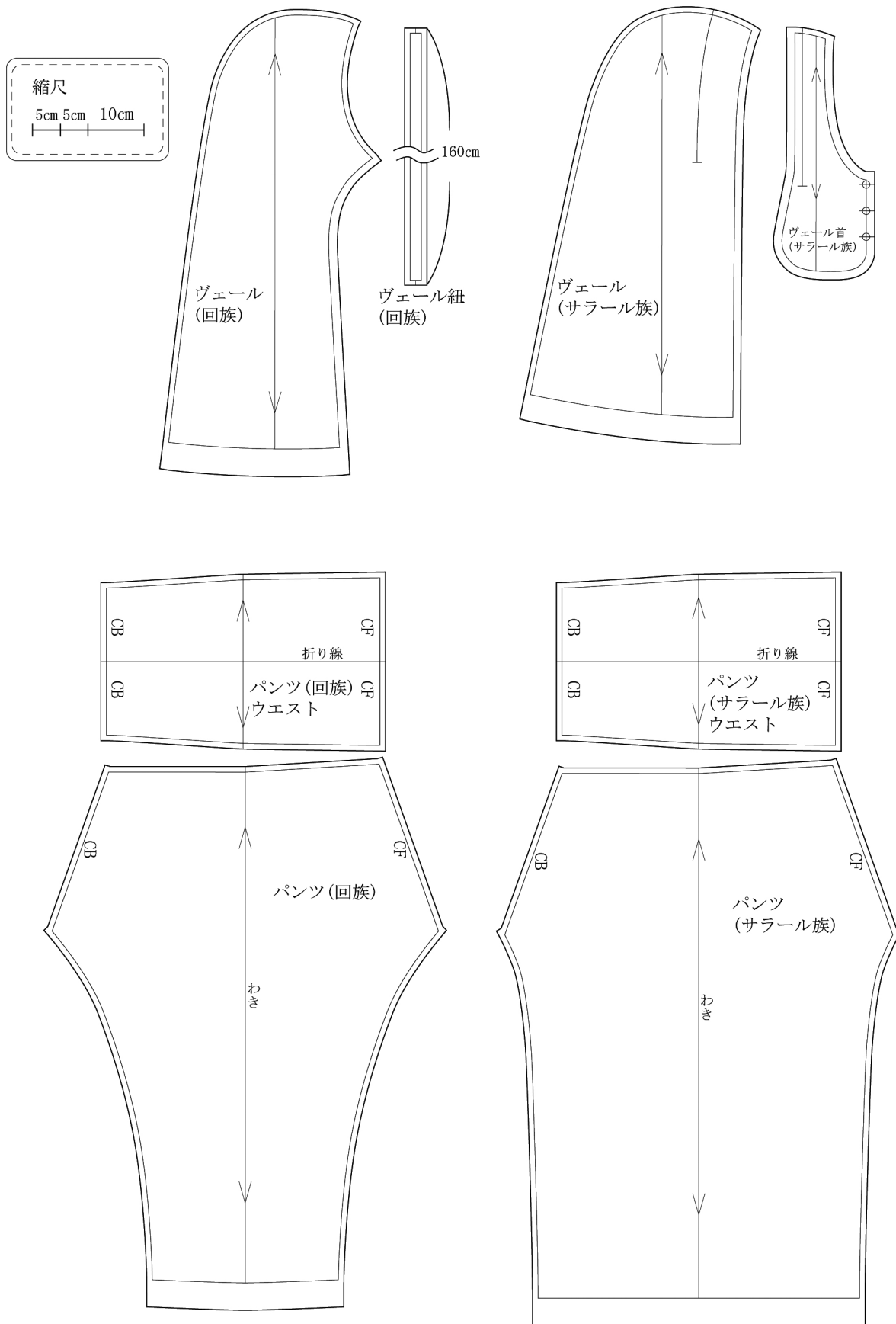


図 16 パターン：回族・サラール族（ヴェール・パンツ）



表1 各パーツの裁断枚数

回族			
アイテム	パーツ	生地	枚数
ヴェール	ヴェール	表地	2枚
	紐		1枚
コート	右身頃	表地・裏地・キルト綿	各1枚
	左身頃		
	上前身頃		
	袖	表地	各2枚
	衿		2枚
	上前見返し		1枚
	スリット見返し		3枚
パンツ	パンツ	表地	2枚
	ウエスト	スレキ	

サラール族			
アイテム	パーツ	生地	枚数
ヴェール	ヴェール	表地	2枚
	首		
トップ	右身頃	表地（表面）	1枚
	左身頃		
	上前身頃		
	袖	表地（裏面）	2枚
	右見返し	表地（表面）	1枚
	上前見返し		
ベスト	右前身頃	表地	2枚
	左前身頃		
	後ろ身頃		
	衿		
パンツ	パンツ	表地	2枚
	ウエスト	スレキ	



图 17 完成写真：回族





図 18 完成写真：サラール族



図 19 完成写真：回族・サラール族  
 左上から 回族衿元、回族横打ち合わせ、回族ボタン、  
 サラール族衿元、サラール族横打ち合わせ、サラール族トップ、  
 回族パンツ、サラール族パンツ

#### IV. おわりに

現在の中国ムスリム女性の服装についてフィールドワークと書物をもとに調査したところ、中華人民共和国が成立した1949年以前に撮影された写真の服装とは全く異なるデザインであることが明らかになった。そのため、中国ムスリム女性の伝統的な服装を未来へと継承することを目的として1949年以前の回族・サラル族の服装を再現した。しかし、写真をもとに再現するにあたっては問題点もあった。写真では確認できない裏地や細部の構成、下着、素材などについての検討が十分ではなかった。服にはゆとりがあり、着用者の寸法の差異があってもほとんど問題はなかったが、ヴェールに関しては着用者によって顔周りがゆるかったり頭頂部が尖って見えたりした。今後は細部の構成やサイズに対する検証も必要である。

とはいえ、筆者にとっては喜ばしいこともあった。本研究で制作した作品の写真を複数の中国ムスリムに見せたところ、女性に「自分にも作ってほしい」と依頼されたり、年配の男性に「昔に戻ったようだ」と言われたりした。特に年配の男性に関しては、自分の母親（1920年代生まれ）が伝統的な服装を着用しているのを見たことがあると述べていたため、それにかかなり近い服装を再現できたのではないかと考えている。

2017年に中国を訪問した時、古い街並みを再現する取り組みが進められていた。再現された地区を実際に訪問したところ、建物自体は新しいものの、時代を隔てた1949年以前の中国に舞い降りたかのような、どこか懐かしい気分になった。景観だけではなく、服装の再現にも同様の力があると考ええる。中国ムスリムに伝統的な服を着用してもらい、彼ら自身にかつての装いを懐かしく思い出してもらいたいと感じた。本稿で試みた中国ムスリムの伝統的な服装の再現が伝統服の継承の一助となれば幸いである。

#### 謝辞

中国におけるフィールドワークでは北京市やフフホト市のムスリムの皆様から助言をいただきました。心からお礼申し上げます。

#### 引用文献

- 1) 大塚和夫『岩波イスラーム辞典』岩波書店、2002年、p.636
- 2) 大沼淳『ファッション辞典』文化出版局、1999年、p.625
- 3) 楊成貴『中国服の作り方全書』文化出版局、1978年、p.12
- 4) 謝黎『チャイナドレスの文化史』青弓社、2011年、p.118-119
- 5) 謝黎『チャイナドレスをまとう女性たち 旗袍にみる中国の近・現代』青弓社、2004年、p.183-186
- 6) 高木美希『ムスリム女性のヴェールとファッション—信仰と流行を追い求めて—』ファッションビジネス学会論文誌 Vol.21、2016年
- 7) 韦荣慧『中国少数民族服饰图典』中国纺织出版社、2013年、p.7  
马雄福『新疆少数民族服饰与节庆』中国旅游出版社、2008年、p.108-109
- 8) 中央民族学院『中国少数民族服饰』人民美術出版社、1981年、p.30  
上海戲劇学院<中国民族服飾>編集委員会『中国諸民族服飾図鑑』柏書房、1991年、p.52-53  
马雄福前掲、p.109
- 9) 楊成貴『中国服の作り方全書』文化出版局、1978年、p.361

#### 図版出典

- 図4. 马雄福前掲、p.108  
図5. 马雄福前掲、p.109  
図6. 小林元『回回』博文館、1940年  
図7. 『北支』12月号、第一書房、1939年  
図8. 王建平『影像记忆 20世纪30年代的撒拉族社会』、民族出版社、2014年、p.224  
図9. 王建平前掲、P.290

#### 参考文献

1. 中田吉信『中国における回族問題』就実女子大学就実短期大学紀要、第22号、1992年、p.135
2. 陶红『回族服飾文化』宁夏人民出版社、2003年
3. 王健平『中国陕甘宁青伊斯兰文化老照片:20世纪30年代美国传教士考察纪实』上海辞书出版社、2010年
4. 中国少数民族地区画集丛刊宁夏册编辑委员会『中国少数民族地区画集丛刊宁夏』民族出版社、1986年
5. 中国少数民族地区画集丛刊甘肃册编辑委员会『中国少数民族地区画集丛刊甘肃』民族出版社、1986年
6. 沈嘉蔚『莫理循眼里的近代中国』福建教育出版社、2005年
7. 梁京武『二十世纪怀旧系列 老服飾』龍門書局、1999年
8. 楊成貴『中国服の作り方全書』文化出版局、1978年